

身体表現における “共振する身体”へのプロセス

東洋英和女学院大学 西 洋子・神戸大学 柴眞理子

本研究のキーワードである“共振する身体”とは、一義的には乳児と母親の間で交わされる共鳴的な響き合い、相互浸透的な共同世界を示す言葉である。例えば発達心理学の領域では、既に母子間の惹きこみ（エントレインメント）や、乳児の母親認知等の研究成果によって、この時期にみられるからだを通しての他者との交流を、人間の原初的なコミュニケーション形態と位置づけ、乳幼児が自他が未分化で一体化した共通世界から、どのように自己を形成していくのかに高い関心が集まっている。

このような自己の確立へと収斂される身体への興味の方向性は、確立された自己と同様の他者が、再度積極的に共通世界を築く局面での身体性を扱う本研究の志向とはやや異なるものではある。しかしながら、これらの研究の知見が、身体そのものに連続的に備わる共同性の能力を深化させることが、乳幼児期はもとより、人間の生涯にわたる発達や成長に大きな影響を与えることを示唆している点は、大変興味深いと思われる。

一方、イメージを自分のからだや動きを通して自由に表す身体表現活動においては、身体そのものが備えている共同性の能力を、教育的な働きかけや、療法という意味づけにおいて意図的に引き出すことで、個々の身体が、現前する様々な差異を超えて響きあう、非言語的なコミュニケーションが活性化することは、経験的には広く認識されていることである。この共同性の体験は、それ自身が活動の楽しさを保障することはもとより、そのことが契機となって、活動者同士の関係性が深まることも、多くの事例を通して語られる真実である。

加えて、近年の高度情報社会においては、直接的な体験や交流の不足による“身体性の欠如”が、深刻な社会問題を引き起こす一因となっているとの指摘もなされ、このような現状の中で、特に身体に関わる教育や療法の領域で、非言語的なコミュニケーションを積極的に活用した身体活動のあり方を具体的に検討することや、非言語的なコミュニケーションの体験がもたらす共同性への回帰と、そこからの自己の再構築への循環を価値づけ、それを包含した視座から人間性の発達や成長の理論を構築する必要性は極めて高いと考える。

発表者はこれまで、積極的な身体活動場面で生起する非言語的なコミュニケーションの様相への

アプローチを目的として、1995年9月から現在にいたる約4年間（1997年8月～1998年8月は一次中断）に、分裂病や躁鬱病等の精神科入院患者との定期的な身体表現活動を行ってきた。この実践的な取り組みでは、言語的コミュニケーションを行わない患者も含めた活動者が、身体表現活動場面での非言語的なコミュニケーションによって、発表者との間で、あるいは患者同士で、相互に交流する実感を築くことができたし、そのことによる患者の身体的な、あるいは心理・社会的な変化を確認することもできた。ここで生じた変化は、極めて多様なものであったが、例えば身体に最も密着した視点からは、身体的な能動性と受動性の相互作用であり、非言語コミュニケーションの基底となる“まなざし”が、身体表現活動での身体のやりとりを通じて回復した事例や、動きのコラボレーションが、ある患者の身体で常に刻まれる単一リズムを一時的に抑制し、他者と共有されるリズムへと転移した事例などが浮かびあがってくる。

また、1998年3月以降の約2年半には、肢体不自由の障害のある幼児・児童・生徒9名と、障害のない児童・生徒9名と一緒に身体表現を行う活動を企画し、支援を続けてきた。こういったインクルーシブな取り組みの中からは、身体表現活動における“共振する身体”へといたるプロセスの中で、活動者間に多くのコンフリクトが生じることと、それを乗り越える形で相互作用が進展した時に、間身体性や間主観性が築かれ、活動者の身体や価値形成のレベルに様々な変容が生じることが確認された。そして、長期的な取り組みを通して、それらの変容が安定した形で定着していくことを経験してきた。

どちらの活動においても、活動場面の映像記録や活動内容の記述、活動者の感想の記述等を一定量収集することができた。

そこで、本研究においては、これらの比較的長期の活動事例に、脊髄性筋萎縮症による重度の障害のある女性と発表者が行った作品創作プロセスの質的研究（1997年12月）や、脳性麻痺の障害のある生徒2名と障害のない生徒1名及び舞踊経験者4名が行った即興表現に関する実験（2000年8月）で収集した質的データを加えたものを、“共振する身体”へのプロセスという視点から再検討し、このプロセスで生起するファクターを抽出・整理したいと考える。さらに、これらの事例から、身体の共同性を基底にした人間の発達・成長モデルの試案を帰納的に作成し、そこから身体表現活動での活動者の変容の普遍的可能性について論じていきたい。